

ペットロス

中村 龍介

昨年十月十五日の日曜日、可愛がっていた雄猫の「ゴンタ」が亡くなった。数日前から御飯を食べなくなり水も飲まなくなつて、近くの動物病院で診てもらつた。血液検査やX線撮影の結果、腸内に出来た腫瘍が原因ではないかと診断された。医師としては更なる検査が必要だとして、十四日の土曜日に腫瘍の生体検査と腸内の超音波検査をやつた。

週明けには検査結果が分かるので、それまで栄養補給と腫瘍を小さくするステロイドを注射して様子を見ることになつた。が、そこまで持たなかつた。

翌日の昼下がり、私の側でじつと寝ていたゴンタが突然目を開いて苦しみ出した。鋭い呻き声をあげると泡状の液体を口から出し、何度も手足をバタつかせる。とても苦しそう。何もしてやれない自分の無力が悲しい。

その後、少し落ち着いたかのように見えたが、時々、痙攣のように身体をビクつかせる。何故だか尻尾が異常に太い。十五時三十八分、間歇的だった呼吸が止まつた。

出自は捨て猫のようなものだが、生まれて直ぐに我が家に来た。その日は借りてきた猫というか、猫を被つていたというのか、とても大人しかった。しかし、翌日には本領発揮、わがもの顔の悪戯猫に豹変した。直ぐに名前がついた。関西弁で「悪戯つ子」を意味する「ゴンタ」。

ゴンタは元気そのもので九年三カ月の間我が家に君臨した。次女と二人で暮らす生活に少なからぬ癒しを提供してくれた。ゴンタが私より先に逝ってしまうことは全くの想定外だった。ポツカリと心に穴が開いたような感覚。十年前、妻に先立たれた時とどこか似ている。

私には四人娘が居るが、それぞれが独立して親元を離れて行く。最後まで残つた次女も一年前に家を出た。だから、ゴンタは唯一の同居人だったのだ。外出から戻り、玄関の扉を開けると、上り框にゴンタが正座して迎える。

「ただいま！」

「(遅かった) ニャア！」

そんな会話が成立していた。

だが、ゴンタが居なくなつてからというものの、帰ってきて誰も出迎えるものはいない。私は、独居老人の寂しさを感じるようになった。否、これは独居老人の孤独ではなく、単なるペットロスかもしれない。

「ペットロス」――「ペットとの別れが原因で飼い主に生じる心理的な打撃」と辞書にある。

そうかもしれない。これまで殆んど夢というものを見なかったが、最近、



よく夢を見る。一度は、夢の中でゴンタがベランダのガラス扉を外から両手でカリカリと掻いている。入れてやらないとー。そう思つて目が覚めた。

ペットロスによる心理的な打撃が脳内に現れ、それが夢の形を取るのではないだろうか。ゴンタのことを忘れよう、忘れようとしていたことが却つてストレスになっていたのかもしれない。

年が改まるのを機に、ゴンタの骨壺を、妻を祀つてある仏壇の横においた。そして、その前にゴンタの写真を飾つた。忘れようとするのではなく、毎日、ゴンタと顔を合わせて、お互いに存在を確認するようにした。

そんなことで効果があったのか、今年に入つてからは夢を見なくなつた。不思議なことだが、独居老人の孤独もあまり気にならなくなつた。

今では、毎朝、仏壇に線香をあげ、最後にゴンタの写真にある足の肉球を指先で弾いて、「大人しくしてろよ」と語りかける。

すると、「お前も頑張れよ」とゴンタから励ましを受けるような気がする。

【二〇一八年一月記 原稿用紙四枚 課題「夢」】